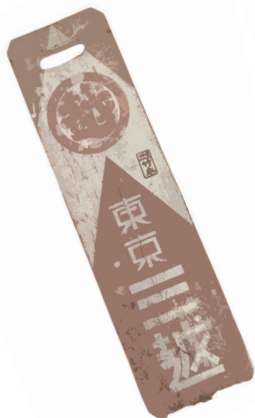
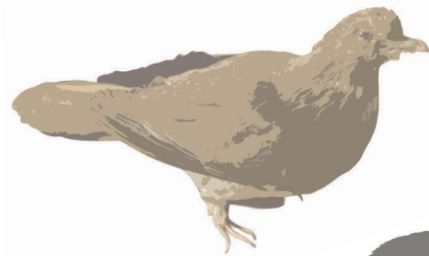
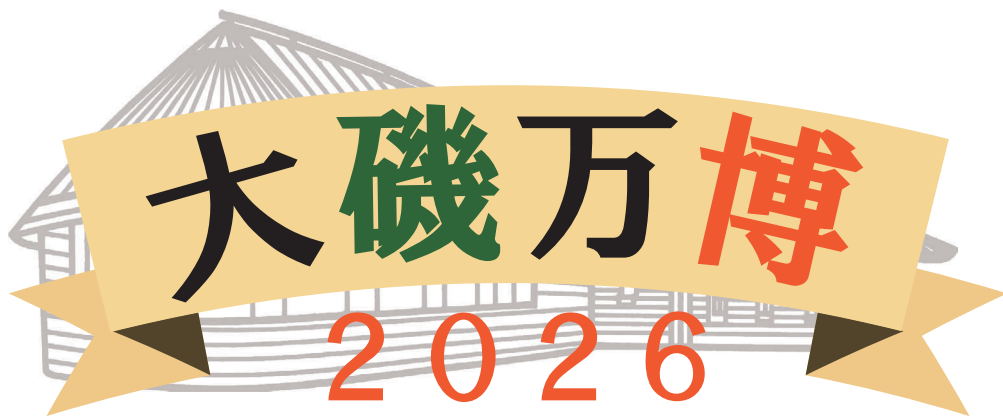


大磯万博

2026

～大磯町郷土資料館新収蔵資料展～





～大磯町郷土資料館新収蔵資料展～

刊行にあたって

大磯**万博** 2026 を開催します。当館は「湘南の丘陵と海」をテーマとした総合**博物館**のため、大磯町をはじめとして、湘南地域を対象に、考古・歴史・民俗・自然の分野で、資料を収集しています。現在、収蔵資料は 10 万点にのぼり、様々な分野のモノ、つまりは**万**^{よろず}のモノが収蔵されている**博物館**となっています。

従来、新たに受け入れた資料を「新収蔵資料展」と題して公開してきましたが、今回は 13 年ぶりの新収蔵資料展となります。本展示は、コロナ禍以降に受け入れた資料を中心に、新しく当館の収蔵資料となった**万**のモノをご紹介します**博覧会**です。

また、**博物館**資料がどのように収集・保存されるのかをご紹介します。本展示を通じて、地域に残る資料の重要性や**博物館**活動の一端を知っていただければ幸いです。

本展の開催にあたりましては、多くの方にご助力をいただきました。改めて深く感謝申し上げます。

2026 年（令和 8）4 月 25 日

大磯町郷土資料館

本企画展は日本万国博覧会（大阪万博）、
大阪・関西万博とは一切関係ありません。

目次

1章 新収蔵資料	5
（1）考古分野	6
（2）歴史分野	12
（3）民俗分野	36
（4）自然分野	48
2章 資料を受け入れる・保存する	53
（1）資料を受け入れる	54
（2）資料を保存する	
①考古分野	56
②歴史分野	58
③民俗分野	60
④自然分野	64
参考文献・Web サイト	66
協力者・協力機関	67

凡例

- 本書は2026年（令和8）4月25日（土）～7月20日（月）に大磯町郷土資料館が開催する、大磯町郷土資料館新収蔵資料展「大磯万博2026」の展示図録である。
 - 本展に出品していても、本書には掲載していない資料や、本書に掲載していても、本展に出品していない資料もある。本書と展示の順序は必ずしも一致しない。
 - 本展示は、郷土資料館学芸職員一同が担当した。
 - 本書に掲載した資料並びに写真について、大磯町郷土資料館所蔵以外のものは原則として所蔵先および提供先を明示した。
 - 本書の編集は真保元（民俗担当学芸員）が行い、執筆を次の通り分担した。
 - 1章（1）、2章（2）①・・・・・・ 國見 徹（大磯町教育委員会考古担当学芸員）
 - 1章（2）、2章（2）②・・・・・・ 富田 三紗子（学芸担当係長・歴史担当学芸員）
鷹野 真子（歴史担当学芸員）
長谷川 明香（歴史担当学芸員）
 - 1章（3）、2章（1）・（2）③・・・・ 真保 元
 - 1章（4）、2章（2）④・・・・・・ 北水 慶一（館長・自然担当学芸員）
 - 表紙および本展示のチラシのデザインは長谷川明香が行った。
 - 本書掲載の写真は、上記執筆分担に応じて担当者が撮影した。
- ※資料の著作権については極力調査にあたりましたが、お気づきの点がありましたらご連絡ください。



漆器椀



高麗寺領山林田畑惣絵図面写

1 章 新収蔵資料



大磯長興結社関係資料一式



ミンククジラの鯨ひげ (乾燥標本)

(1) 考古分野

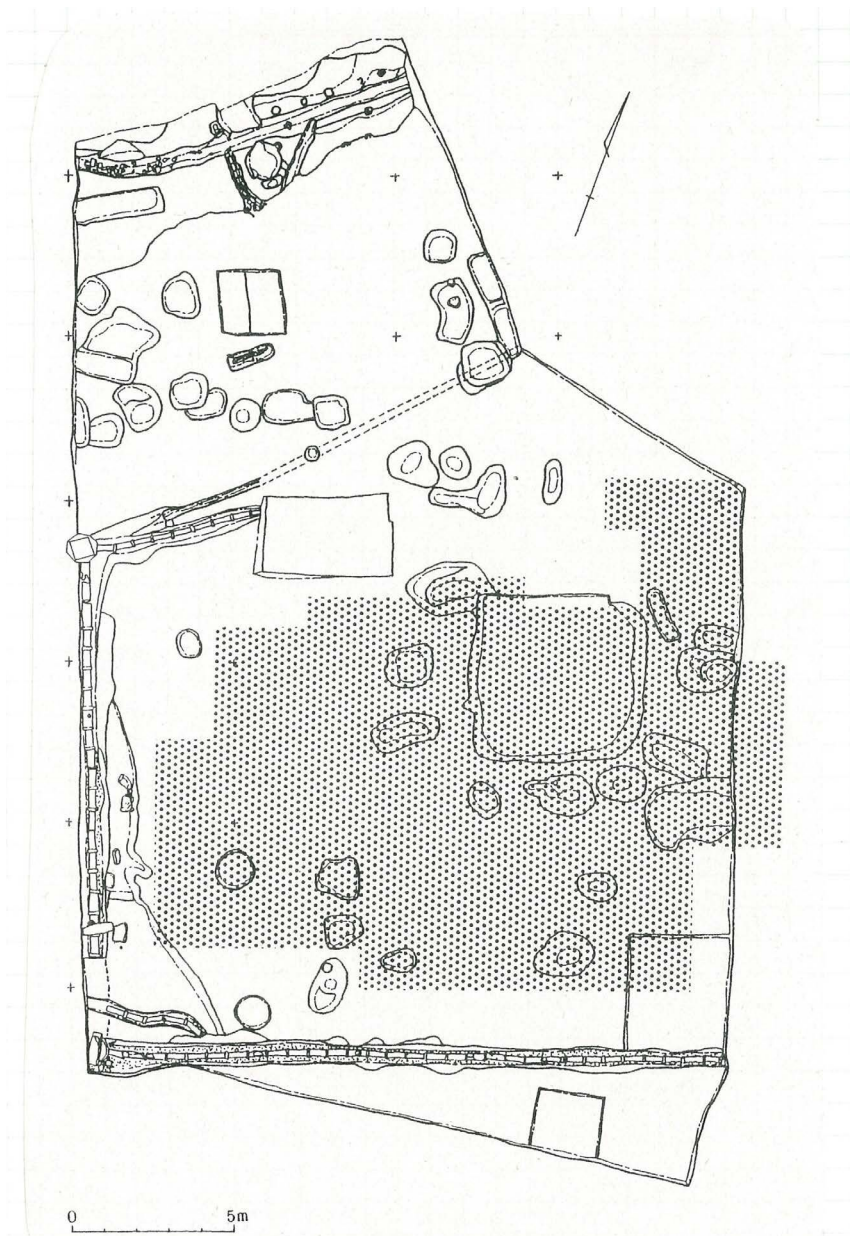
発掘調査等で出土した遺物のうち、鉄製品などの金属製品や木製品などの有機質資料は、適切な措置を施さないと、保管の継続や活用等に供することが困難である。今回の展示では、近時保存処理が完了した、井戸^{いどし}址と思われる遺構から出土した漆器碗と、横穴墓出土の鉄製品を紹介する。

また、近年出土した土器資料の紹介も兼ねて、考古資料の整理についても紹介する。

しんめいまえいせき 神明前遺跡

本遺跡は縄文～近代の複合遺跡として周知される。当該地は明治期には旧佐土原藩^{さどわら}島津家の別荘として使用されたと伝えられ後、昭和11年（1936）頃に別の所有者によって新たな別荘がたてられたという。

発掘調査により、排水施設、煉瓦遺構、土坑等の遺構や赤煉瓦、耐火煉瓦などの煉瓦資料や、洋食器、汽車土瓶などの陶磁器が出土しており、大磯町域における別荘地の考古学的調査の端緒として挙げられる遺跡である。近現代面の下位の面において、中世かと思われる大型の土坑が検出された。



神明前遺跡全体図／近現代面
（『大磯町史 10 別編 考古』所収）



漆器碗 (処理前)



漆器碗 (処理後)

現存高 2.8cm 高台径 6.4cm

本資料は、中世の井戸であろうと考えられる土坑から出土した資料である。

土中から出土した木製品は、木材の構成組織が失われて水分が飽和状態となっており、そのまま乾燥させると著しく変形して元に戻らなくなってしまうため、水に漬けた状態で保管する必要がある。本資料は平成4（1992）年の発掘調査以来、30年以上水中保管していたが、PEG（polyethylene glycol / ポリエチレングリコール）の含浸と、真空凍結乾燥を併用した保存処理を施し、室内での保管と展示等への活用が可能となった。



井戸址と考えられる土坑

平成4年（1992）撮影

どうのしろしもよこあなぼくん
堂後下横穴墓群

大磯丘陵は全国でも屈指の横穴墓群の密集地である。大磯町域においては64群、500基近い横穴墓の存在が知られている。堂後下横穴墓群は大磯町国府本郷字堂後下に存在した遺跡である。本遺跡の存在は早くから知られており、昭和30年(1955)には神奈川県教育委員会による発掘調査が行なわれ、線刻画が確認されている。また昭和46年(1971)には赤星直忠氏の「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」において紹介され広く知られることとなった。昭和61年(1986)には神奈川県立博物館による調査が行なわれている。

公共施設建設に伴い、平成11年(1999)と平成13年(2001)に記録保存のための発掘調査が行なわれた。



南半調査風景

平成13年(2001)撮影



堂後下横穴墓群(南半)

平成13年撮影



堂後下横穴墓群(北半)

平成11年(1999)撮影



堂後下横穴墓群全景合成写真



【処理前】 大刀片
 大刀の刀身部の破片と考えられる。



【処理後】



【処理後】 大刀片
 大刀片 現存長 6.0cm 幅 3.0cm

大刀片・鉄鏃等 (堂後下横穴墓群)

横穴墓の副葬品として供された鉄製品である。発掘調査により出土した鉄製品は、錆化が進行していることが多く、放置しておくとも更に劣化してしまうため保存処理が必要となる。

保存処理に際してはX線写真撮影等の事前調査を経て、錆を除去するクリーニングを行なう。次に土中の塩分を除去する脱塩処理を行なった後に樹脂を含浸させる。保管に際しては脱酸素剤を封入した袋の空気を抜き、錆化の原因となる酸素と触れないようにする。



【処理前】 鉄鏃等



【処理後】 鉄鏃等
 最長現存長 10.3cm ※処理前3片が接合

ぎ おんづか
祇園塚遺跡

大磯町国府新宿字祇園塚を中心とする、古墳時代から中世にいたる複合遺跡である。不動川の南岸に位置しており、対岸には相模国府関連遺跡であると考えられている馬場台遺跡が存在する。

本遺跡は現在まで 30 箇所近い地点で調査が実施されており、前述各時期の遺構・遺物の存在が確認されているが、特筆すべきは奈良時代と考えられる瓦が多数存在しており、^{ゆるぎんが}余綾郡衙関連の遺跡であると考えられている。



① 祇園塚遺跡D地点 (平成2年(1990)調査)



③ 祇園塚遺跡 (東長谷川/平成5年調査)



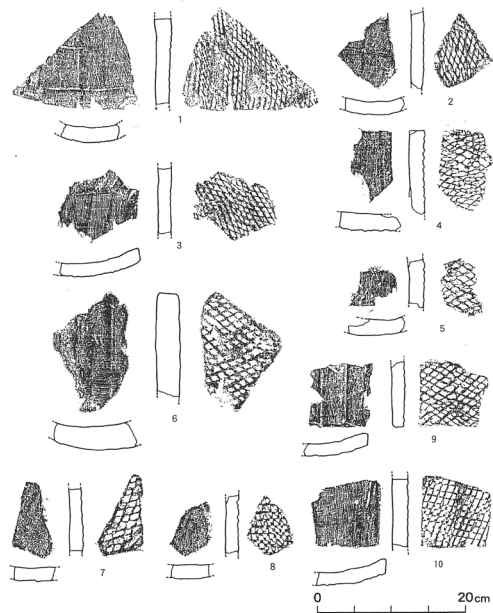
④ 祇園塚遺跡 (東長谷川)



⑤ 祇園塚遺跡 (東長谷川II/平成6年(1994)調査)



② 祇園塚遺跡G地点 (平成5年(1993)調査)



⑥ 祇園塚遺跡採集瓦 (『大磯町史10別編 考古』所収)



はじきちようがめ
土師器 長胴甕 (奈良時代末～平安時代初頭、上図：表面、下図、裏面)

器形は底部から外傾して立ち上がり、肩部から内傾する。胴部下位の接合痕が顕著である。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部はわずかに肥厚する。底部は木葉痕を撫でにより消している。外面は不定方向の撫でにより工具痕を消している。内面は木口状の工具による撫でを施している。

寸法 (cm) 器高 30.9 口径 22.5 底径 7.0 × 6.3

色調 外面 Hue10YR7/3 にぶい黄橙色、一部吸炭がみられる

内面 Hue5YR6/6 橙色



(2) 歴史分野

歴史分野では、地域の成り立ちや変遷に関わる記録を歴史資料として、収集、保管、調査研究、展示等に活用している。神奈川県では1960年代から民間所在資料（いわゆる旧家などで保管されてきた古文書）の悉皆調査が行われ、大磯町でも大磯町史編纂時に大半の古文書は把握されているが、近年、郷土資料館が収集した資料は、それらの調査では見落とされたとも言える資料である。また、地域の歴史を伝える資料は、江戸時代のような遠い昔の資料ばかりではない。令和に使われていた資料も、使用されなくなれば歴史資料としての価値を持つことになる。

高麗寺村の村役人の家に伝わった資料

本資料群は、江戸時代に、高麗寺村（現・大磯町高麗）の村役人を務めた高橋庄兵衛（庄蔵）家に伝わった資料群である。高麗寺村では、名主・組頭・百姓代のいわゆる村方三役は、古百姓の家格を持つ家が務めることになっていた。高橋庄兵衛家は、この古百姓14軒の内の1軒にあたり、江戸時代を通して高麗寺村の名主・組頭・百姓代を務めている。

高麗寺村

高麗寺村は、高麗寺が徳川氏から高100石の朱印地（寺領）として与えられた村である。大磯の周辺では、鎌倉の寺院を除いて100石の寺領を持った寺社は、相模国一の宮の寒川神社（寒川町）、遊行寺として知られている時宗総本山の清浄光寺（藤沢市）、大山参りで有名な大山寺（伊勢原市）のみである。さらに、高麗寺村は、寺領が一つの村をつくっていたことが特徴である。

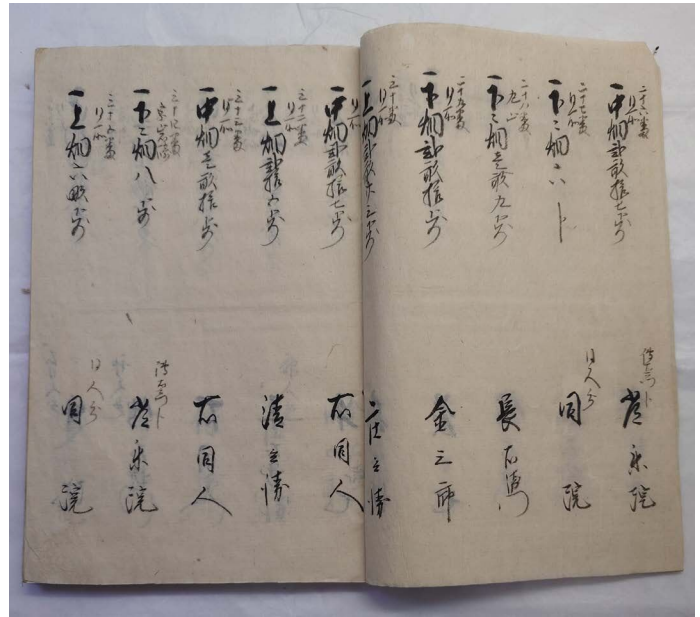
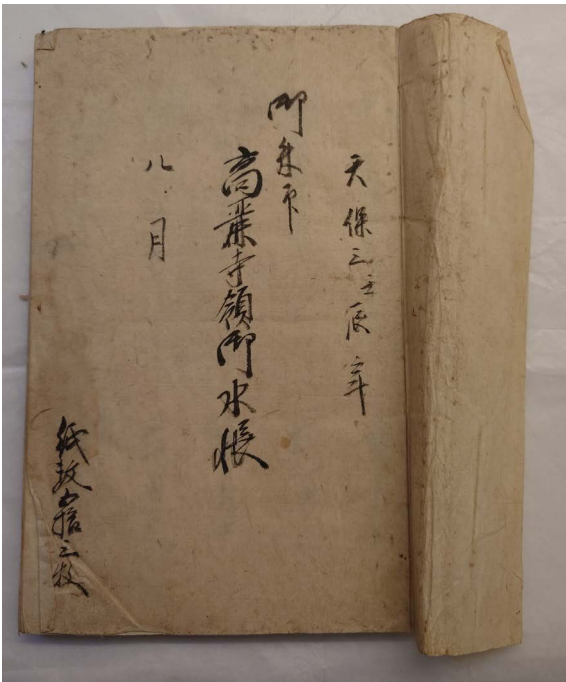
高麗寺村には約250人の人が住み、約40軒の家があった。土地は田より畑が多く、花水川の水害を受けやすい環境にあった。人々は耕作の合間に酒造や居酒屋、米穀商いを行い、特定の商売を持たない男性は藁仕事を、女性は木綿糸業を行っていた。



脇差

2022年3月寄贈

高橋庄兵衛家に伝わったもの。江戸時代は、武士身分でないと刀を差せなかったが、それは大刀のことであり、脇差であれば百姓身分でも所有していた。特に村役人を務める者であれば、このような脇差は所有した。

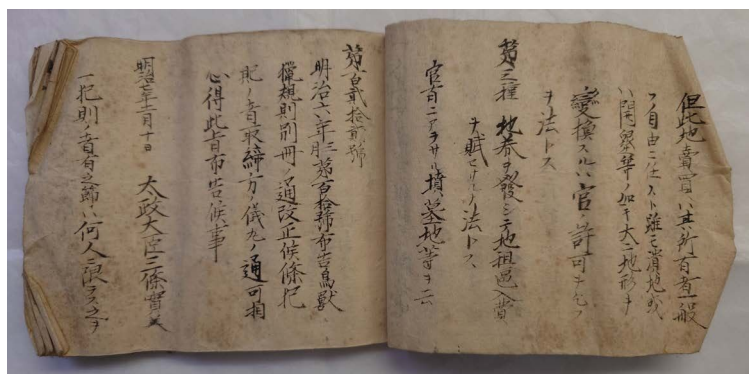
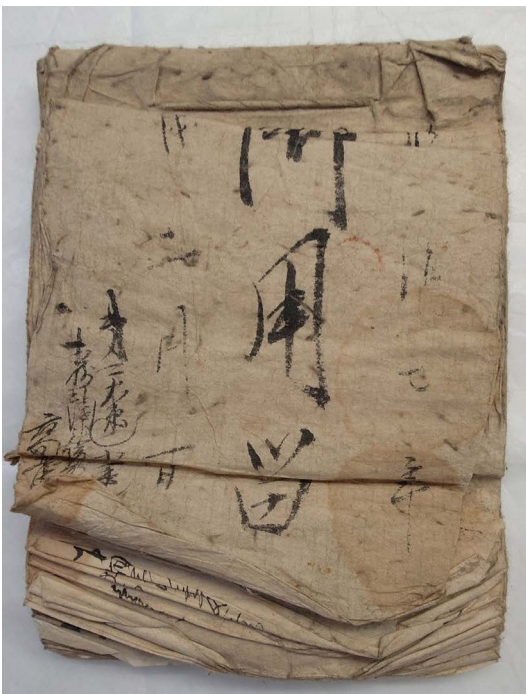


高麗寺領御水帳

天保3年(1832)8月

2022年3月寄贈

御水帳とは検地帳のことで、田畑などの土地を測量(検地)した上で、土地の面積と所有者を書き表した、いわゆる土地台帳である。本展で展示している高麗寺村の絵図を作成した際に同時に作られた帳面であろう。ただし、本資料は写本であり、末尾に明治5年(1872)に書き写しものである。地域にとって大事な土地台帳の情報を持つことは、村役人の特権とも言える。



御用留

明治7年(1874)2月

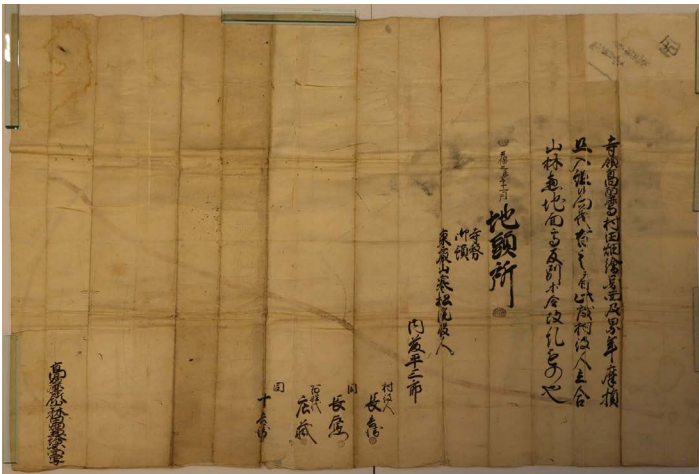
2022年3月寄贈

御用留とは、政府からの通達などを備忘のため書き留めたもの。この当時、高橋家の当主であった高橋庄兵衛は高麗村の副戸長を務めており、政府からの通達などを書き留めている。写真は鳥獸規則が改正されたことを伝えるもの。太政大臣三條實美(三条実美)の名が見える。

高麗寺領山林田畑惣絵図面写



<裏>



寺領高麗寺村田畑絵図面及累年摩損
 且入組候向茂有之二付、此度村役人立合
 山林惣地面高反別等令改糺もの也
 天保三辰年十一月 地頭所 (印)
 寺務
 御預
 東叡山寒松院役人
 内藤平三郎
 村役人 長兵衛 (印)
 同 長左衛門 (印)
 百姓代 庄蔵 (印)
 同 十兵衛 (印)
 高麗寺領山林田畑惣絵図面写

天保3年11月

2022年3月寄贈

高麗寺村を描いた絵図。本絵図は、現在、本図を含めて3点確認されており、1点は高麗寺に伝わったもの、1点は高麗寺村の村役人を務めた曾根田重兵衛家に伝わったもの、そして本図の同じく高麗寺村の村役人を務めた高橋庄兵衛家に伝わったものである。全点、当館で所蔵しているが、高麗寺に伝わったものは町の有形文化財に指定されており、本図も指定文化財に匹敵する価値があると言える。

<参考>



寺領高麗寺村田畑絵図面

天保3年(1832)11月

本図は、高麗寺が所有していたものと考えられる。P.14 掲載の高橋庄兵衛家に伝わった絵図は、本図を写したものであり、裏書もほぼ同一である。ただし、高橋庄兵衛家に伝わった絵図の裏書には、東叡山寒松院役人の内藤平三郎の印が無い。



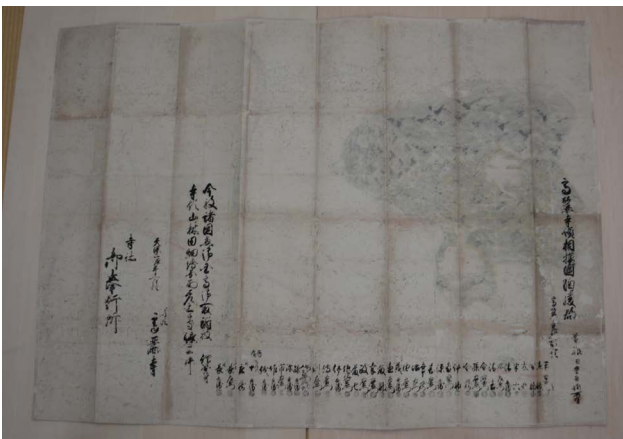
【裏書】
 寺領高麗寺村田畑絵図面及累年摩損
 且入組候向茂有之二付、此度村役人立合
 山林惣地面高反別等令改糺もの也
 天保三辰年十一月 地頭所(印)
 寺務
 御預
 東叡山寒松院役人
 内藤平三郎(印)
 村役人 長兵衛(印)
 同 長左衛門(印)
 百姓代 庄蔵(印)
 同 十兵衛(印)



高麗寺領相模国陶綾郡高麗寺村絵図

天保3年(1832)11月

本図は、曾根田重兵衛が所有していたもの。裏書から、高麗寺が寺社奉行へ提出したものの写しと考えられる。このことから、天保3年の高麗寺村絵図には、高麗寺が保管したものと、寺社奉行へ提出したものの2種類があったことがわかる。



【裏書】
 高麗寺領相模国陶綾郡 曾根田重兵衛所有
 高麗寺村百姓
 (三四名記名捺印)
 所有 百姓代 十兵衛(印)
 同 庄蔵(印)
 名主 長左衛門(印)
 同 長兵衛(印)
 今般諸国惣御国高御取調被 仰出候二付
 寺領山林田畑絵図面差上候處依而如件
 天保三辰年十一月 地頭 高麗寺
 寺社御奉行所

虫窪の測量士 古正政五郎の資料

虫窪むしくぼ ふるしょうの古正政五郎は、明治維新时期に地元で測量活動を行った人物である。子孫が保管していた資料には、地租改正時に作成された虫窪地区の絵図が含まれていた。明治政府は国の近代化を進めるため、江戸時代以来の課税方法を大きく変える。その一つが土地（地価）に課した税であり、土地を測量し直して、土地の所有者を明らかにして地券を発行した。土地の測量は、簡単な講習を受けた村の作業人らによって行われたというが、政五郎は静岡県土族で測量製図司であった大橋光曙の門人であったようであり、測量士として絵図を作成したと考えられる。本展では、作成された絵図と共に、測量道具も紹介する（本書 P.45）。



測量改正野取絵図のとり（虫窪村の測量絵図）

明治6年（1873）8月

2025年2月寄贈

明治6年に布告された地租改正条例のために作成された虫窪村（現・大磯町虫窪）の絵図。地租改正条例の布告は7月であり、本絵図は8月に作成されていることから、条例布告前から絵図の作成にあたって準備が進められていたと考えられる。古正政五郎作成。

虫窪村と黒岩村あざきりの字切図

明治10～12年（1877～79）

2025年2月寄贈

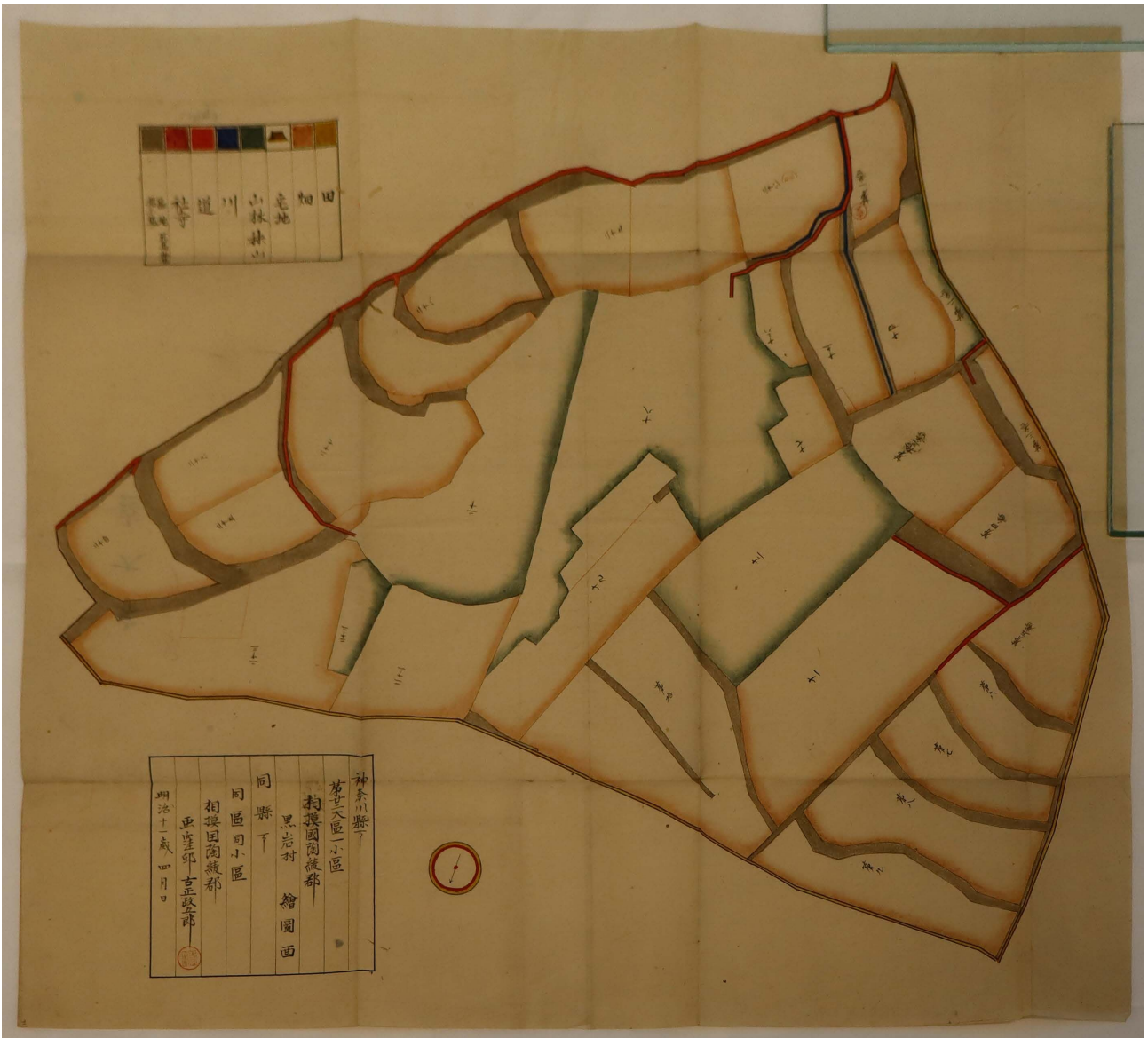
明治6年に作成された改正野取絵図は、虫窪村全域を表しているが、これらの絵図は、字ごと、字単位で作成された地図である。いずれも古正政五郎が作成した。虫窪村に隣接する黒岩村（現・大磯町黒岩）の地図もあり、政五郎が居住する虫窪地区以外の地域の地図も作成していたことがわかる。

虫窪村の字切図





黒岩村の字切図

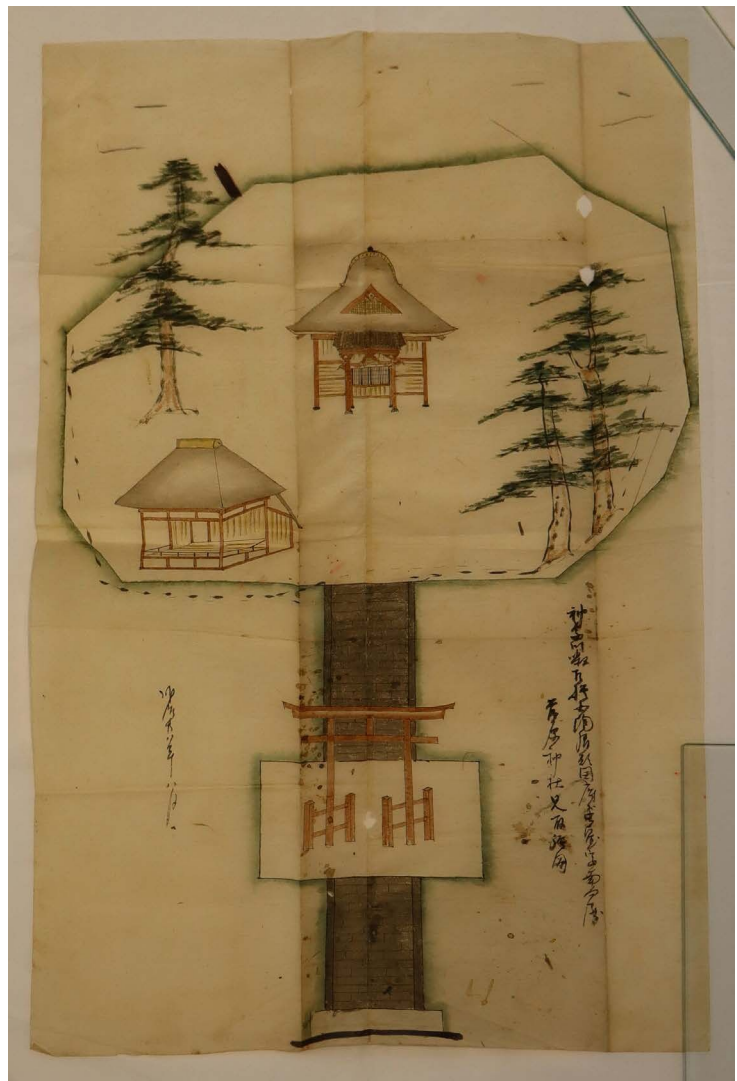
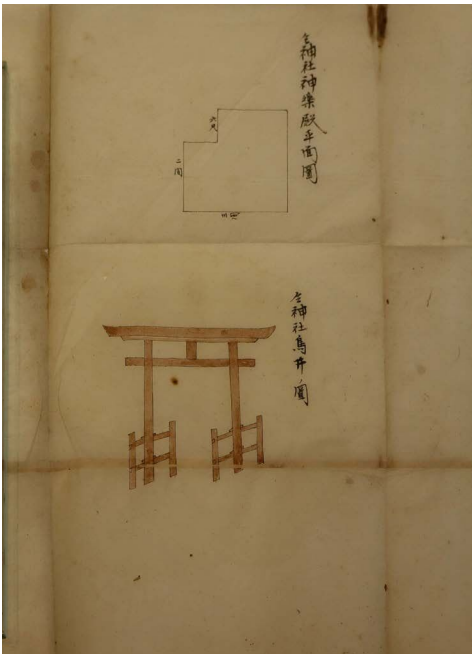


菅原神社の図面

明治28年(1895)頃

2025年2月寄贈

菅原神社は天神社とも呼ばれる、虫窪地区の氏神である。記名はないが、恐らく古正政五郎が作成したもの。緻密な筆運びが、政五郎の腕をうかがわせる。



大磯町役場の資料

この防災服は、町役場の歴史を表す資料として収集した。町役場の仕事は、大磯という地域に影響を与えることは言うまでもない。町役場でかつて使われていたモノは、貴重な地域資料になり得る。町役場から資料を収集するときは、備品などを所有する担当部署が変わるという意味で、「移管^{いかん}」という扱いになる。これは、管理が移るという意味である。



大磯町の防災服

昭和57年（1982）頃～令和5年（2023）9月頃

2025年7月移管

町職員が災害発生時などに着用した防災服。令和5年（2023）9月に新装したため、現在、展示している防災服は使用していない。防災性のある素材でできている。

小学校タイムカプセル保管資料

大磯町には町立の小学校が2校あり、いずれも明治6年（1873）の学制施行時に創立した学校として、令和5年（2023）に開校150周年を迎えた。両校は、開校100周年を迎えた昭和48年（1973）に50年後の開披を予定してタイムカプセルを封印。50年の時を経て開封されたタイムカプセルからは、50年前を伝える映像フィルムが見つかった。本展では、その貴重な映像を紹介する。



大磯小学校のタイムカプセルに保管された映像
2023年11月移管



国府小学校のタイムカプセルに保管された映像
2023年11月移管



大磯町役場の様子

昭和48年撮影

「町関係ビデオ」から抜粋。インタビューは大磯小学校教員の野地昌和、ビデオ録画は同じく大磯小学校教員の河合剛英。町長が当時、完成した直後であった町役場庁舎を紹介し、町長・助役・収入役の三役をはじめ、教育長、各課長にどのような仕事をしているのかインタビューするという内容。当時の町役場の様子がよくわかる。



大磯小学校の様子

昭和48年撮影

「児童関係ビデオ」から抜粋。教員のナレーション付き。児童の登校から、朝礼、授業、給食の様子が撮影されている。



国府小学校の一日

昭和48年11月16日撮影

授業の様子や休み時間の様子が撮影されている。ナレーションはなし。

大磯ゆかりの人物 (近現代)

吉田茂

当館では、大磯に別荘や邸宅を構えた人物に関する資料の収集を行っている。なかでも、内閣総理大臣を五度務め、戦後日本の復興と独立に尽力した吉田茂は大磯に本邸を構えた人物で、当館においても吉田に関する資料を多数所蔵している。

その中から今回紹介する資料は、平成29年(2017)3月および令和5年(2023)5月に、吉田茂のご遺族より寄贈があった、吉田茂の勲章および、その勲記(証書)である。

※勲章のみで勲記がないもの、あるいは勲記のみで勲章がないものもある。



大勲位菊花大綬章 (上：正章/下：副章)

昭和39年(1964)4月29日

2017年3月寄贈

日本の最高位の勲章。旭日大綬章または瑞宝大綬章(いずれも国家または公共に対し功労のある者に授与される)の中でも、優れた功労がある者に授与される。



大勲位菊花大綬章 勲記

2023年5月寄贈



旭日大綬章 (上：正章／下：副章)

昭和15年12月4日

2017年3月寄贈

国家または公共に対して勲績のある者に授与される。



旭日大綬章 勲記

2023年5月寄贈 個人



旭日重光章 (勲記のみ)

昭和6年(1931)10月31日

2023年5月寄贈



瑞宝大綬章 (上：正章／下：副章)

昭和9年(1934)4月29日

2017年3月寄贈

公務に長い間従事し、成績を上げてきた人々に授与される。



瑞宝大綬章 勲記

2023年5月寄贈



瑞宝重光章 (勲記のみ)

昭和6年(1931)1月21日

2023年5月寄贈

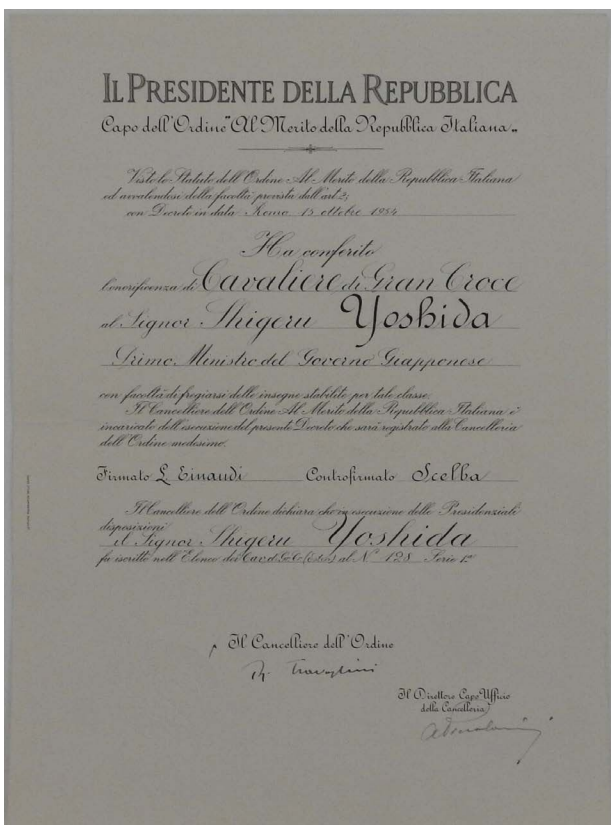


イタリア共和国功労勲章 (上：正章／下：副章)

受勲時期不明

2017年3月 寄贈

科学、文学、芸術および商業の分野において国家のためにつくした功労について、公衆福祉の推進について、社会、博愛または人道関係事業のためにつくした功労について、さらに、行政および軍事での抜群の功労があった者に授与される。



イタリア共和国功労勲章 勲記

2023年5月 寄贈 個人



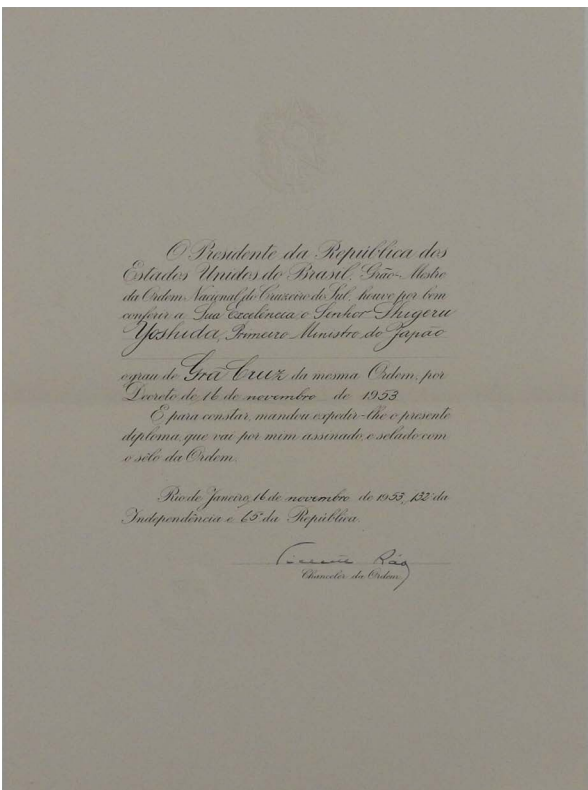
南十字星国家勲章 (ブラジル)

(上：正章／下：副章)

昭和28年(1953)11月18日

2017年3月 寄贈

ブラジル政府が外国人に贈る最高の国家勲章。



南十字星国家勲章 勲記

2023年5月 寄贈



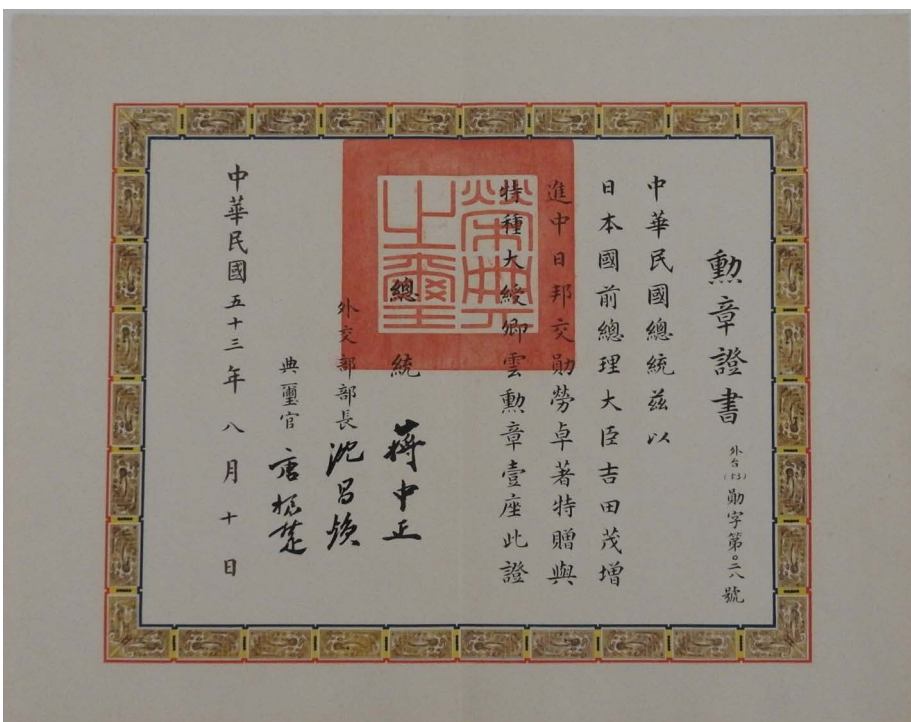
けいうん
卿雲勲章 (台湾)

(上：正章／下：副章)

昭和39年(1964)8月10日

2017年3月寄贈

国家の政務に功労のあった公務員、国家・社会に対して顕著な貢献をした非公務員、もしくは外国籍の人物に授与される。



卿雲勲章 勲記

2023年5月寄贈



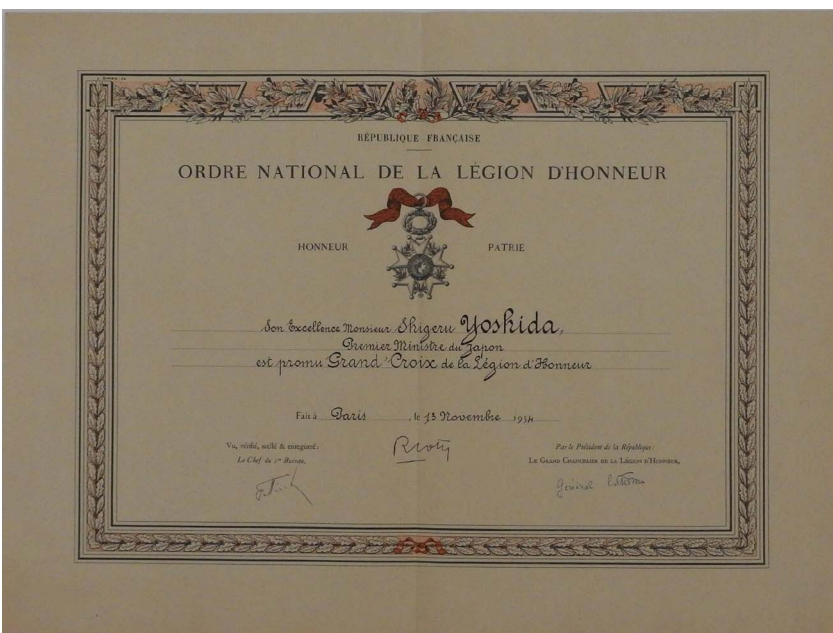
レジオン・ド・ヌール勲章 (フランス)

(上：正章／下：副章)

昭和 29 年 (1954) 11 月 13 日

2017 年 3 月 寄贈

1802 年、ナポレオン・ボナパルトによって創設された栄典。国家に奉仕した文民・軍人に与えられる最高位の国家勲章。



レジオン・ド・ヌール勲章 勲記

2023 年 5 月 寄贈



聖マウリッツォ・ラザロ勲章 (イタリア)

(上：正章／下：副章)

受勲時期不明

2017年3月寄贈

騎士団勲章のひとつ。



有功一等勲章 (ドイツ)

(上：正章／下：副章)

受勲時期不明

2017年3月寄贈

1951年に連邦大統領テオドル・ホイスによって制定された。政治・文化または経済社会の分野において、連邦共和国の再建期間およびその後に功績をつくした者に授与される。



芸術文化勲章（フランス）

受勲時期不明

2023年5月寄贈

芸術・文学の領域での創造、もしくはこれらのフランスや世界での普及に傑出した功績のあった人物が授与される。



ロイヤル・ヴィクトリア勲章（イギリス）

（上：正章／下：副章）

受勲時期不明

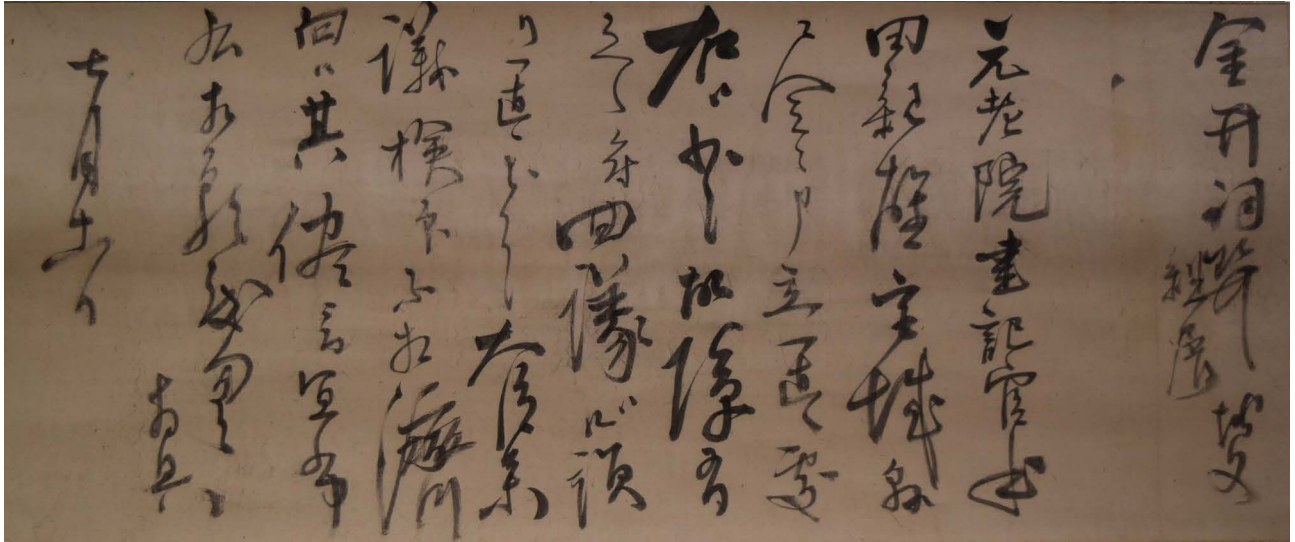
2023年5月寄贈

王室に対し功績のあった者に授与される。

伊藤博文・与謝野晶子・中島湘煙^{しゅうえん}

伊藤博文は大磯に本邸「滄浪閣」を構え、道路の開通や学校の校舎建築など大磯町の近代化に貢献した人物である。与謝野晶子は、大磯の南下町にかつてあった大内館に滞在したことがあり、湘南地域に関する詩も多く残している。女性民権運動家・作家の中島湘煙は、土佐藩出身の政治家で自由民権運動などで活躍した中島信行の妻である。夫婦ともに結核の療養のため、明治31年(1898)11月に大磯字釜口下に別邸を構え、大磯で亡くなった。

ここでは、3人に関する書簡や書を紹介する。



^{かない ゆきやす}
金井之恭宛伊藤博文書簡

(明治10年～20年代) 7月11日

2025年購入

群馬県出身の官僚で、元老院議員などを務めた金井之恭に、伊藤博文が宛てた書簡とみられる。「金井詞聲」とあるが、金井の字である「子誠」の当て字ではないかと考えられる。

七月十一日	右相願度 勿々 拜具
元老院書記官本	田親雄宮城県
二全て申立置候処、	右ハ少々故障有
之候二付、回議心請	ケ置被下候大臣參
議檢印不相濟	向ハ其俣ニ而宜敷
議檢印不相濟	右相願度 勿々
向ハ其俣ニ而宜敷	拜具
右相願度 勿々	
拜具	



伊藤博文 (1841 - 1909)



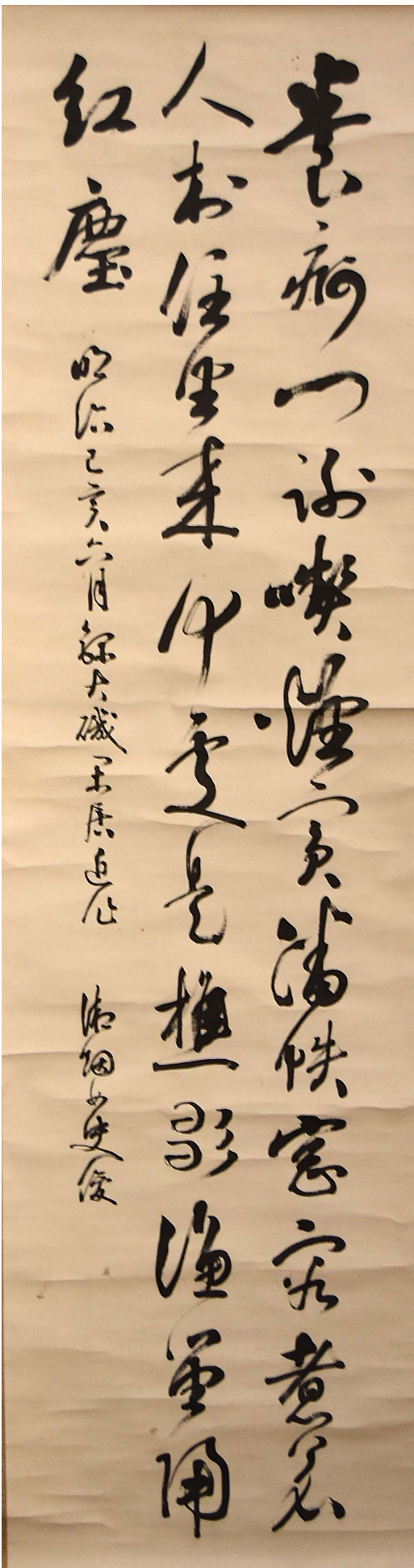
金井之恭 (1833 - 1907)

藤野彦次郎『明治肖像録』より



滄浪閣 (和館)

明治29年(1896)、西小磯に建てられた伊藤の本邸。広大な敷地に、和館と西洋館が建てられ、多くの政財界人が訪れた。



養痾川詠喫煙美藩帙窓容煮茗
 人於住坐來何処是樵□漁笛誦
 紅塵 明治己亥六月於大磯閑居近作

湘煙女史俊

中島湘煙書

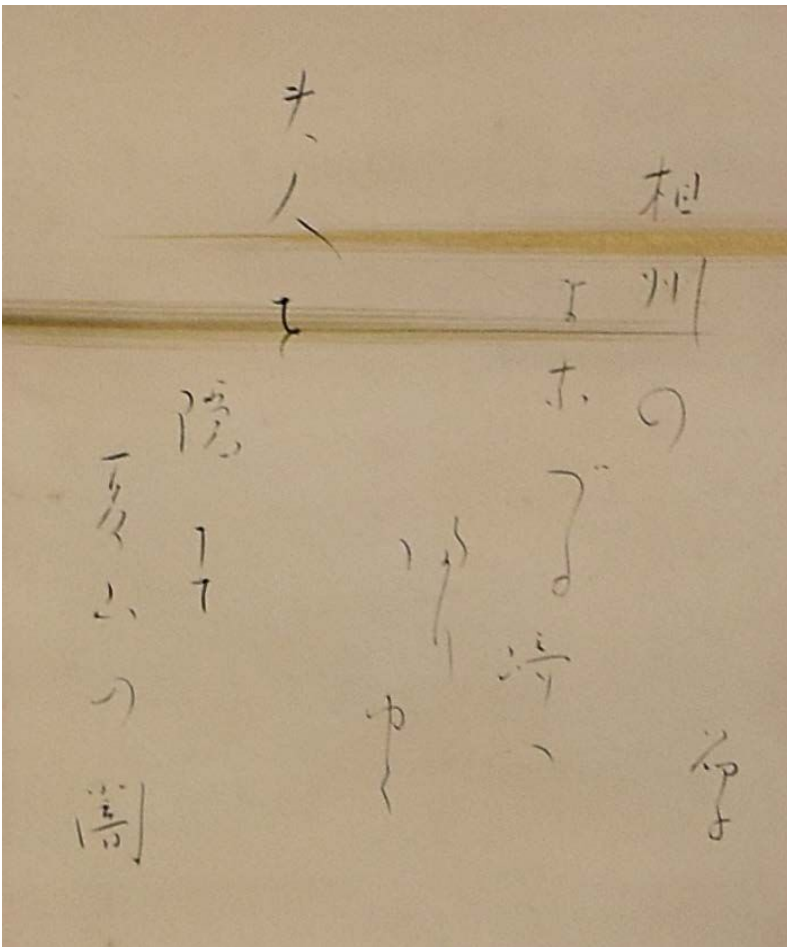
明治32年(1899)6月

2025年6月寄贈

中島湘煙が、大磯での療養中に書いた書。世の中から離れて生活している様子を詠んでいる。



えらばれて
板敷にあり
山上の
兵隊の荘の
朝かほの花
晶子



相州の
まなづる崎へ
浸りゆく
夫人を
隠して
夏山の闇
晶子

与謝野晶子詩 (上、下)

年代不明

2025年2月寄贈



与謝野晶子 (1878 - 1942)
近代日本人の肖像 (『国立国会図書館』) より



(番参話電) 館内大館旅浴温小海磯大
大内館 (大正中期~後期)



大内館 (昭和 63 年 (1988) 撮影)

(3) 民俗分野

民俗学は私たちの当たり前の暮らしの変遷をたどる学問である。その際に、博物館で収集される民俗資料は地域の暮らしの変遷を読み解く鍵となる。

ここでは、信仰や人生儀礼といったハレ（非日常）の生活道具と、漁具や農具、日用品などのケ（日常）の生活道具の新収蔵資料を紹介する。

ハレの生活道具

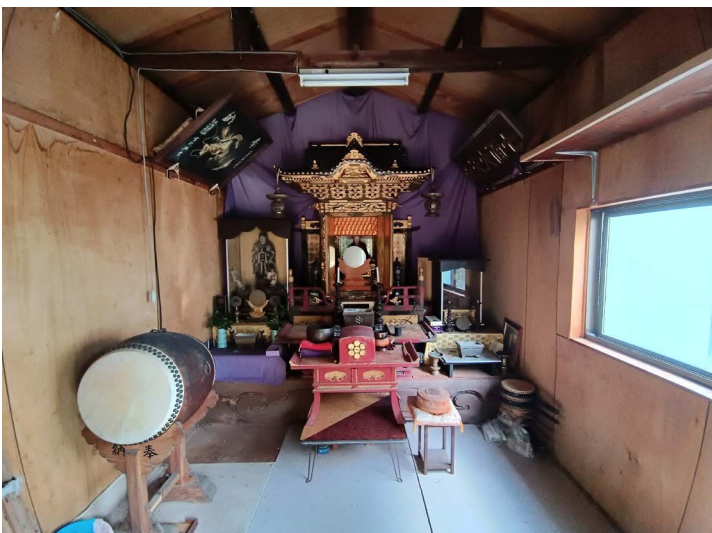


ちょうこう
大磯長興結社関係資料一式

大磯町大磯（山王町）

2025年3月寄贈 大正～昭和期にかけて使用

日蓮上人の像や藤沢の龍口寺の札などがあることから、日蓮宗系の講集団であったと考えられる。仮設の堂に保管されていた。



堂内部の様子

2025年11月撮影

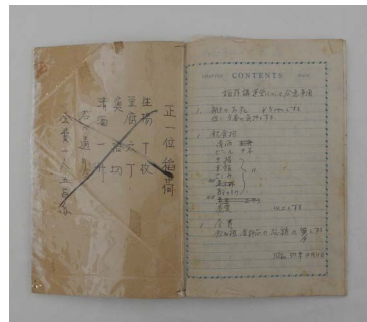
大磯町大磯（山王町）

いなりこう
稲荷講

稲荷講は稲荷社の祭りであり、2月の初午か、2月11日の建国記念日に行われる。集落内部を分けた組や講中といわれる集団で構成されていることが多い。個人の^{やしきがみ}屋敷神の稲荷を周辺の有志が信仰して講を結成したり、同族や同姓集団で講を結成することもある。

講の参加者で順番にヤドを決めていき、当日はヤドの家で稲荷に赤飯や油揚げ、目刺しを供えて^{のぼり}幟を立てて室内に掛軸を掛け、講の参加者が集まって参拝する。初午が終わると、次のヤドの家に幟や掛軸などを渡す。

稲荷は農村では農業の神、漁村では漁の神として考えられていたほか、都市部では商売繁盛や火災除け、縁結びの神として祀られており、現在でも路地やビルの屋上に祀られていることがある。



稲荷講の道具 (左図：一式、右上図・下図：帳簿)

大磯町国府新宿

2025年3月寄贈

国府新宿^{はらちよう}の原町で行われていた稲荷講の道具である。

幟には「昭和四十七年」と書いてある。帳簿にはスケジュールのほか、領収書などの書類があり、行事の実態や変遷がうかがえる。



稲荷講の様子 (左図：幟、右図：講の様子)

左図は2017年、右図は1989年の稲荷講の際に撮影された。



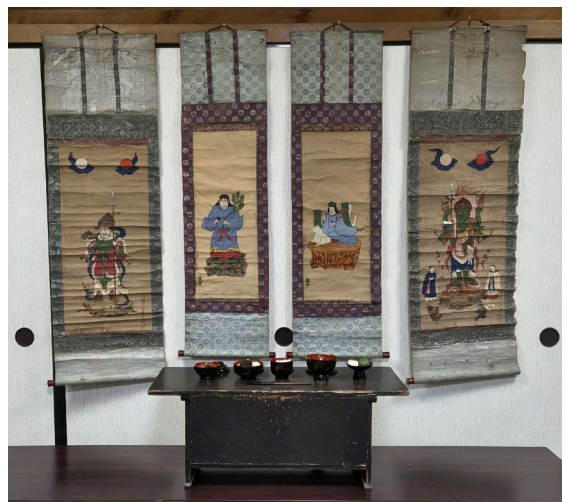
稲荷講の道具 (上図：一式、右図：掛軸)

大磯町虫窪

2025年12月寄贈

むしくぼ むかいくぼ
虫窪の向窪地区で行われていた稲荷講の道具である。

幟には「弘化三年(1846)」と書いてある。この稲荷講では山こうしんこうの神講や庚申講、地神講といった他の講の掛軸なども一緒にかけて祀られるのが特徴である。おそらく、他の講が稲荷講にまとめられて信仰されるようになったと考えられる。



掛軸と器を展開した様子

講仕舞いの様子 (2025年11月撮影)

虫窪老人憩いの家にて撮影。



刀掛け

大磯町西小磯

2026年3月 寄託から寄贈

西小磯の白岩神社しらいわで3月に行われる祭礼の際、地区の公民館である憩いの家では伊藤博文（P.32を参照）の刀などをはじめ、伊藤にまつわる道具を祭壇のように組み上げる。

本資料は2025年3月の祭礼まで、公民館内で伊藤の刀をかけるのに使用された。刀を掛ける部分はシカの角でできており、地区の方が伊藤の刀を掛けるため、製作したものといわれている。



白岩神社の祭礼（2025年3月撮影）

弓矢を使って的の当たり方からその年の吉凶などを占う歩射ふしや行事が行われる。



藤公神社とうこう（2026年3月撮影）

白岩神社の横にあり、白岩神社の祭礼時には伊藤が祀られる。

ダイカイ

塗り物の器で、親戚が亡くなった際や、帯祝い（妊娠5ヶ月目の戌の日に行われる行事）の際に、親戚間で赤飯を入れて運んで贈るのに使われた。デーケーともいわれ、椀型と円筒型のものがある。運ぶ際には木箱に入れて天秤棒で担ぐ。

神奈川県西部ではエジュウ、大磯や平塚などの相模川以西の県央部ではダイカイ、相模野台地南部から鎌倉周辺ではアカハチ・オハチ、相模野台地北部から横浜、川崎ではハンダイ・アカハンダイなどとよばれる。

また、ダイカイは一荷、半荷が基準である。一荷は天秤棒の両端に1個ずつ＝ダイカイ2個である。半荷は一荷の半分＝ダイカイ1個となる。ダイカイ一荷につき、3升5合を入れるのが基準だという。

葬式の場合、例えば親や兄妹は一荷、オジオバ、イトコには半荷を贈るなど、親族間の血の濃さで赤飯を贈る量が決まっていた。葬儀場での葬儀が一般的となった現在では、ダイカイを贈る習俗はみられなくなっている。

立派な塗物であるダイカイは、高価なものであった。そのため、どの家にもあったのではなく、旧家などが持っており、持っていない家は借りて使ったといわれる。地域の中で家格をあらわす器だといえる。

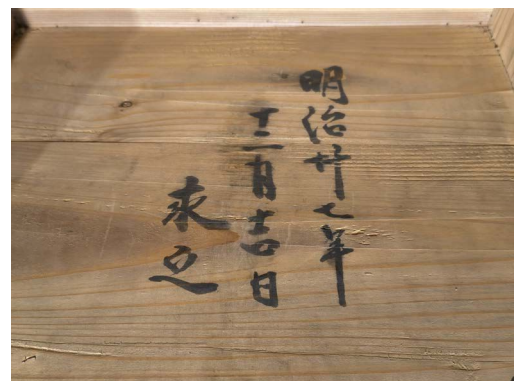


ダイカイ（左図：全体像、右図：器のみ）

大磯町西小磯（西小磯西）

2025年4月寄贈

寄贈者によれば、このダイカイは国府新宿などに車で持っていったことがある。



ダイカイ（左図：全体像、右図：木箱内部）

大磯町虫窪

2025年2月寄贈

木箱内部には「明治廿七年（1894）十二月吉日」とある。

マイワイ

大漁や進水式など、漁業または漁師の祝い事があったときに注文・製作され、家紋や家印いゑじるしが入り、めでたい絵柄や漁の模様、漁に関する文字を染めた着物（大漁を祝う晴れ着）をさす。漢字では万祝と表記する。生地は木綿が一般的だが、絹を使用することもある。袖口は広く開いている平袖であり、地の色は藍染が多い。

神奈川県のほか、千葉県や茨城県、福島県や静岡県でもマイワイとよばれ、岩手中部以北では「大漁バンテン」といわれ、北は青森、南は静岡まで分布が広がっている。

大磯では大漁時には船に大漁旗（本書 P.42～43）を立てて帰港した。地引網漁で大漁になると、船の経営者であり漁業権の所有者であるフナモトはそのたびに赤、黄色、水色などに染めたテヌグイや三尺帯を作って配り、さらに大漁が続き、特別に収益が上がった場合は、マイワイを仕立てる。テヌグイはヒキテ（フナモトやフナカタの家族や近所の親しい人たち）にも配られるが、マイワイを配るのはフナカタ（フナモトと雇用契約を結び地引船に乗る漁師）までであったという。

マイワイは製作に相当な金額がかかった。地引網では大漁といってもそこまで利益が出るわけではないため、マイワイまで出るとはあまりなかったが、ブリの定置網では何度か出たことがあった。作ったマイワイを着て、相模大山へお礼参りに出かけたこともあったといわれる。



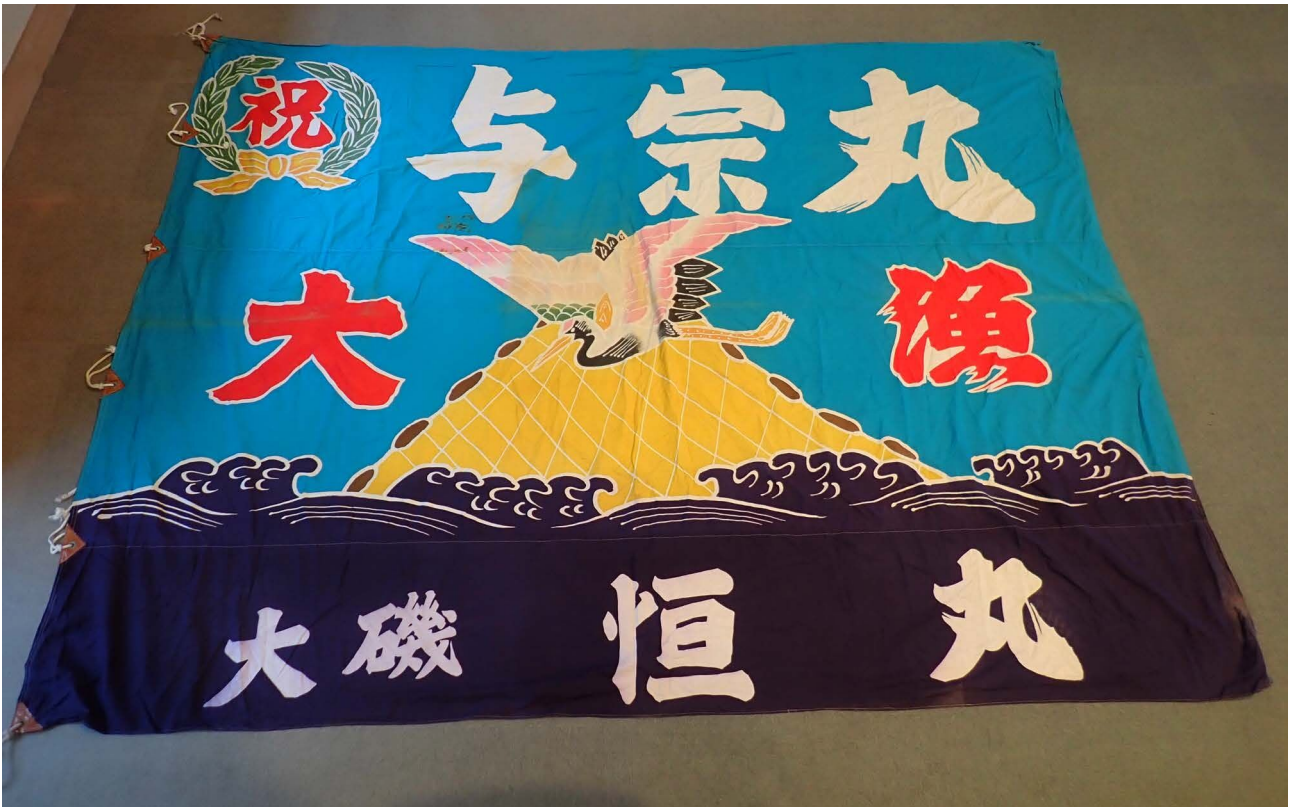
マイワイ

大磯町大磯（長者町）

2025年10月寄贈

背型（背の絵柄）は扇に「大」「相模漁業株式会社」の文字、腰型（裾の絵柄）は波・網（大謀網）・ブリ・亀・千鳥が描かれている。「大漁」の文字、亀の背に「大磯第八期」の文字がある。

昭和3年（1928）の、大謀網によるブリの大漁を祝って作られたものと考えられる。



大漁旗

大磯町大磯（南下町）

2024年7月寄贈

船を新しくした際に贈られる。船に付けて使用し、大漁の際にブリ 1000 匹につき 1 枚揚げるなどを決めておき、大漁を陸に知らせた。正月などのハレの日や魚市でも使用される。



大漁旗

大磯町大磯（南下町）

2024年7月寄贈

下図では「茅ヶ崎港」とあるように、大磯以外の船からも贈られることがわかる。ここからは、漁業従事者同士の港を超えたつながりが見えてくる。

ケの生活道具



トグワ (上図：全体像、右図：柄の付け根部分)

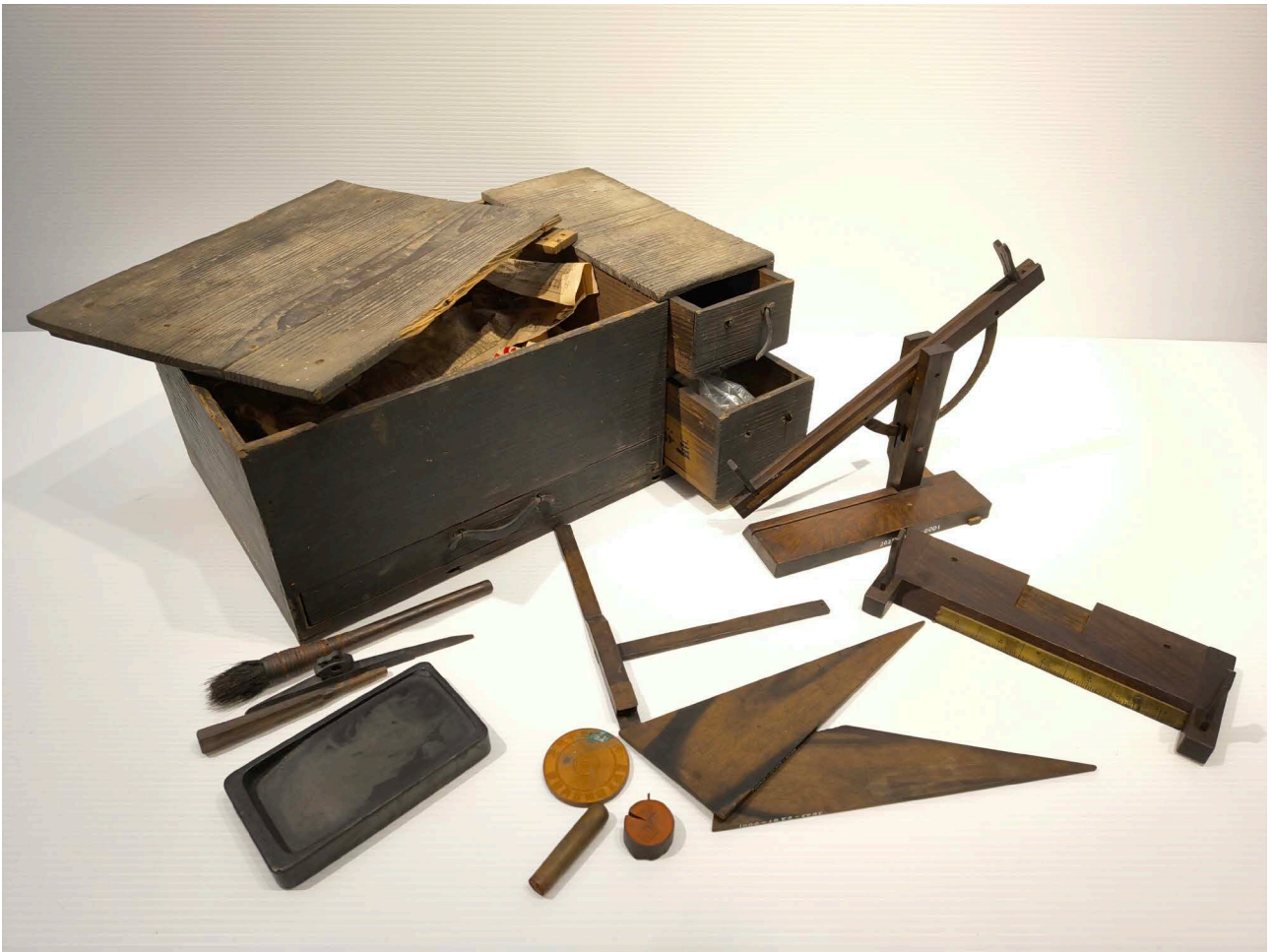
大磯町西小磯 (西小磯東)

2026年2月寄贈

木の根を裁ち切り、土を掘り起こすことに使用する。

柄の付け根部分には寄贈者の家印である「ヤマに中」の焼き印がある。





測量道具

(上図：全体、右図：測量道具（アリダードか）、
下図：引き出し部分）

大磯町虫窪

2025年2月寄贈

虫窪の古正政五郎が測量活動（P.16 参照）に使用していた測量道具である。

収納用タンスの引き出しには「明治七年（1874） 戌極月（12月）吉日」とある（下左図参照）。





バカシの材料

(上図：全体像、左図：収納時)

大磯町大磯 (南下町)

2026年3月寄贈

海で曳き釣りなどの漁法に使用する、バカシ (疑似餌) の芯である。マッコウクジラの歯が使われており、歯を切ったり削ったりしながら作っていく、製作過程がわかる資料となっている。

完成した芯は縦に穴があいており、あいた部分から糸とゴム製のタコとよばれる部品をつけて使用した。

昭和40年ごろまで使用されていたが、現在はクロームメッキやプラスチック製のものに置き換わっている。

蚊取り線香

カヤブヨを駆除・忌避する際に焚かれる。豚の形をした陶器製のものは蚊遣豚^{かやりぶた}と呼ばれ、蚊取り線香を焚くための器として使われる。



蚊遣豚

二宮町富士見ヶ丘

2026年2月寄贈

2025年度開催の「くらしとムシー生活・信仰・文化財―」では個人蔵として展示し、展示後に寄贈となった。

萬古焼 15年ほど前に購入。庭仕事の際に庭で使用していた。蚊取り線香が中に取り付けられるようになっている。



蚊遣（左図：表面、右図：裏面）

大磯町大磯（山王町）

2026年3月寄贈

舟形 蚊取り線香が中に取り付けられるようになっている。戦後から2000年前後まで、寄贈者の家の日本間の入口で使用していた。

現在、寄贈者は蚊遣は使用せず、スプレー式の殺虫剤で蚊を対処している。

(4) 自然分野

大磯町における鯨類の確認記録

鯨類は歯を持つハクジラ類と歯の代わりに鯨ひげを持つヒゲクジラ類に分類される。

ハクジラの歯は、餌となる生き物（以下、餌生物・じせいぶつ）を捕まえるのに適し、鯨ひげは餌生物と一緒に口の中に入れた海水をこし出すのに適した構造になっている。餌生物は鯨類の種類や生息海域、時期などによって変化するが、主にハクジラ類はイカや魚、海獣など、ヒゲクジラ類はオキアミ類や魚、イカなどを好む。

ハクジラ類で最大の種類は、マッコウクジラで体長は16 mくらいまで成長する。また、ヒゲクジラ類で最大の種類は、シロナガスクジラで体長は33 mくらいまで成長する。

大磯町における鯨類の確認状況は表1のとおりである。郷土資料館の記録の他、文献等の記録があるものを列記したが、1957年以降10件の漂着、混獲が確認されている。種類としては、ハクジラ類のイチョウハクジラ、コマッコウ、アカボウクジラ、スジイルカ、ハナゴンドウ、マッコウクジラ、ヒゲクジラ類のミンククジラの合計7種類である。

鯨の他に、スジイルカ、ハナゴンドウといったイルカが含まれているが、イルカも鯨類である。例外はあるが、成熟した時の体長が4 mを超えるものがクジラ、4 mを超えないものがイルカと言われている。

種名	性別	体長	確認日	確認場所	確認状況	備考
イチョウハクジラ	雄	4 m 72cm	1957年9月22日	—	漂着	
コマッコウ	雄	—	1963年8月17日	—	漂着	
アカボウクジラ	—	—	1991年5月19日	国府新宿 (もしくは国府本郷)	漂着	
アカボウクジラ	雌	約5 m 70cm	1996年6月13日	国府新宿	漂着	
ミンククジラ	雄	約3 m 90cm	2006年2月23日	大磯	定置網に混獲	
ミンククジラ	雄	約7 m 50 cm	2016年3月30日	国府本郷	漂着	
スジイルカ	—	1 m 87cm	2021年6月8日	東町	漂着	
ハナゴンドウ	—	1 m 52cm	2022年6月25日	東町	漂着	
(不明)	—	—	2022年12月1日	大磯	漂着	中型種もしくは大型種と思われる尾骨
マッコウクジラ	—	約20 m	2025年6月20日	大磯	漂着	頭部のみ5 m

表1 大磯町における鯨類の確認状況

鯨類の記録写真



アカボウクジラ (1991年5月19日漂着)



アカボウクジラ (1996年6月13日漂着)



ミンククジラ (2006年2月23日定置網に混獲)



ミンククジラ (2016年3月30日漂着)



スジイルカ (2021年6月8日漂着) 亀倉弘美氏撮影



マッコウクジラ (2025年6月20日漂着)

新収蔵資料



ミンククジラの鯨ひげ (乾燥標本)

長さ 57cm

2016年3月30日に、国府本郷に漂着したミンククジラの鯨ひげ。鯨ひげがあるのは上あごだけで、下あごには歯も鯨ひげも存在しない。



ミンククジラの鯨ひげ (乾燥標本)

長さ 48cm

2006年2月23日に、大磯沖の定置網に混獲されたミンククジラの鯨ひげ。有限会社湘南定置から脊椎骨と一緒に提供があった。



マッコウクジラの歯

左：17cm 右：13.5cm

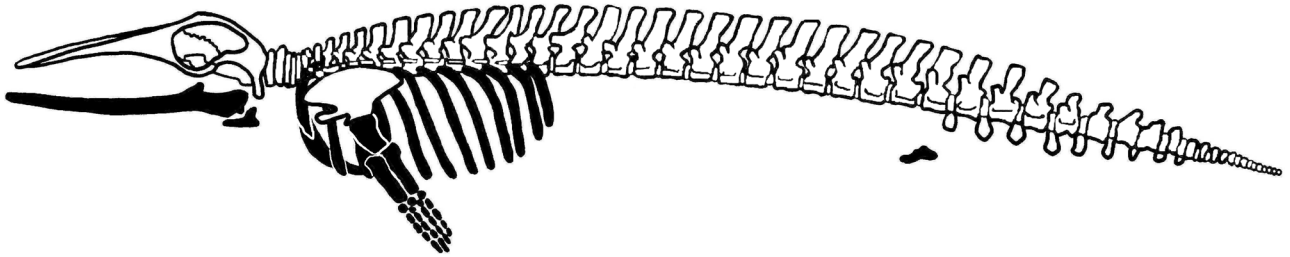
2002年に、町内在住の方から寄贈があった。

マッコウクジラの歯は、下あごのみ存在しており、上あごには存在しない。下あごには全部で40、50本の歯がある。

ミンククジラの骨格

平成18年（2006）2月23日に、大磯港沖の定置網に掛かっていた体長約3m 90cmのミンククジラの骨格標本である。ミンククジラは体長が8mほどにも成長する鯨類で、主に地球の北半球の海洋に生息している。

郷土資料館では展示や研究等の活用のため、骨や歯を採集して保管しているが、偶発的に定置網に掛かってしまった場合や海岸に漂着した場合などに限り、国の機関へ届出をすることで、学術目的で保持することができる。



郷土資料館で所蔵しているミンククジラの骨格の部位

黒くぬりつぶした骨は、保管していない。

鯨ポータルサイト（<http://www.e-kujira.or.jp/gahou/minke2.html>）をもとに作成。



土器の洗滌



文書資料の収納

2章 資料を受け入れる・保存する



資料への注記



標本の展示

(1) 資料を受け入れる

当館では 1988 年の開館以来、博物館活動の一環として考古・歴史・民俗・自然分野の資料の収集を行っている。本書 1 章において紹介した資料はいずれも学芸員たちによる調査研究に基づいて収集された資料である。

本章では、これらの資料が収集される経緯や、収集した後どのように保存していくのかをみていく。

資料の受入の過程

分野や状況による差異はあるものの、資料の受入れ過程を簡単に示すと次のようになる。

資料の受入方法：当館では、資料は以下の 5 パターンで受入れている

<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>1. 資料に関する相談を受ける</p> <p>↓</p> <p>2. 資料調査を行う</p> <p>↓</p> <p>3. 郷土資料館内での受入の協議</p> <p>↓</p> <p>4. 資料を運ぶ</p> <p>↓</p> <p>5. 資料を登録する（台帳への記載）</p> </div>	寄贈	所有者が資料と資料の所有権を全て博物館に寄付する方法。
	寄託	所有者が資料の所有権を保持したまま、一定期間、資料を博物館に預ける方法。寄託途中で寄贈資料へと変更される場合もあれば（P.39 参照）、返却する場合もある。
	採集	現地で学芸員らが直接資料を採集する方法。植物や動物を対象とする自然分野や土器などを対象とする考古分野などでは、採集での受入れが盛んである。
	購入	資料を購入して受け入れる場合。 （例：古書店から資料を購入）
	移管	庁内の他の部署などの資料を受け入れること（P.20 参照）。

以下では、受入れの各過程について詳しくみていく。

1. 資料に関する相談を受ける

家の蔵を壊すので中のものを見てほしい。地域で行事を終わりにするため、道具を見てほしい。海辺にこんなものが落ちていた……。郷土資料館には日々、地域の方々から相談が来る。各分野の学芸員が対応し、実際に現場に向き、調査を行うこととなる。

2. 資料調査を行う

地域の方から話を聞き、使っている様子（例：いつ頃のものなのか）などの資料についての情報を聞き取っていく。



資料調査の様子（左図、右図）

2025 年撮影

学芸員が相談者と一緒に資料を見つつ、聞き取り調査を行う。



屋外での仮洗滌



土器の洗滌

ブラシを用いて、土器に付いた土を落とす。



洗滌・乾燥後



接合後

②歴史分野

歴史資料は、古文書などの紙資料が多い。紙資料は、光や温湿度の変化、カビ、ホコリなどに弱く、耐久性が低い資料のため、劣化や汚損をできるだけ防ぐための保存処理が必要となる。

まず、古文書を受け入れたら、目につくホコリや汚れなどを落とし、中性紙封筒に入れる。封筒に資料番号や資料名などの情報を書き、中性紙箱に順番に入れて保管する。中性紙の保存容器を使う理由は、資料の酸性劣化を防ぐためである。インクをのせやすくするために酸性物質（硫酸アルミニウムなど）が用いられた酸性紙は、黄色く変色し、最終的には破れて壊れてしまう。酸性紙で挟んだり触れたりした資料にも酸性物質が付着してしまうため、中性紙の保存容器を使うことでその脅威から資料を守ることができる。しかし、掛軸や大型の写真など、封筒に入れることができないものもあるため、資料の特徴に応じた保存処理を施さなければならない。



中性紙封筒

劣化を招く光やホコリ、酸性環境などから資料を守るための中性紙でできた封筒。主に古文書の保存に用いられる。

しかし、一般的な封筒に比べ高価（平均50枚入りで4,000～7,000円。1枚当たり90円～150円）であり、湿気や水に弱い。



中性紙保存箱

古文書や書籍などを長期保存するための中性紙でできた箱。資料を光やホコリ、酸性環境などから守ることができる。

通常のダンボール箱より厚く、耐久性が高いが、中性紙封筒同様、高価（平均1箱8,000円）で、湿気や水に弱い。



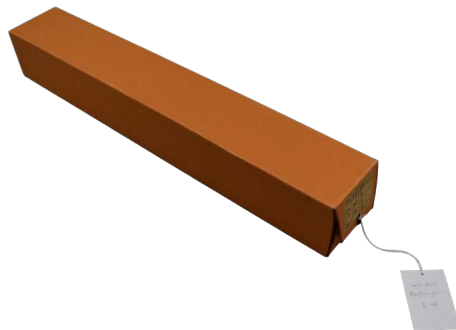
収納の様子

箱の大きさは棚のサイズに合わせて特注している。箱の前にかけてあるベルトは地震等の揺れで箱が落下しないようにするためのもの。



資料タグ（上図：掛軸につけた様子）

封筒に入れることのできない掛軸やモノ資料には、資料番号などを明記したタグをつける。これにより、直接資料を傷つけることなく、どのような資料なのかを判断でき、紛失を防ぐことができる。



アルカリバッファード

保存箱やタトウなどに使われる厚手の専用ボード（弱アルカリ性）。資料の形態や大きさによって加工ができ、大型の写真を挟んだり、書籍に被せたりして資料を守る。



ネガアルバム

フィルムカメラで用いられるネガフィルム（色や明るさが反転したフィルム）を保存しておくためのアルバム。



写真アルバム

現像された写真や絵葉書は一般的に用いられる写真アルバムを使って保存することもある。大量に保管できるため、収納効率は良いが、湿度変化や酸性環境などに弱いため劣化しやすい。

③ 民俗分野

民俗資料の整理

民俗資料は、衣食住や農具漁具といった日常生活の道具から祭礼用具や冠婚葬祭の道具まで、多岐にわたる。資料の性質や形状、材質も資料ごとに異なるため、整理方法もそれぞれに合わせた方法が望ましい。また、棒形であったり（P.41 トグワ）、丸形（P.43 の蚊遣豚）、角形（P.40 のダイカイ）など、形状も不定形で統一性が無いため、収蔵にあたって効率良く収納していくことが大事となる。

次に、当館での整理過程について大まかな流れを紹介する。まず、ホコリや泥土等のクリーニングを行ったうえで台帳をもとに資料番号を作成し、注記を行う。その上で実測を行い、写真撮影作業を行う。以上の過程を経て確認した情報を資料カードに記入し、タグの作成を行う。

民俗資料はモノそれ自体の情報（＝モノ情報）はもちろんのことながら、その資料が「どのように使われていたのか」をあらわすコト情報が重要になる。例えばフルイであっても、農具として使ったのか、漁具として使ったのか、はたまた炊事に使ったのか、そもそもいつ頃使われていたのか……。同じ見た目のモノでも、資料それ自体に様々な来歴が含まれており、それを明らかにすることで、展示や調査研究、普及活動を行う際の貴重な情報源となる。

カードやタグを作成し、写真を撮り終えてコンテナ箱や棚に収蔵したことで、資料整理の流れが完了する。



資料への注記

注記は資料を管理するうえで欠かすことのできない作業である。

当館では白色の水性ペン等を用いて注記を行っている。



資料の実測

資料情報をはっきりさせるためにも、寸法の実測は欠かすことのできない作業である。

目録上で資料情報を確認する際にも、資料の規模感を示す重要な情報となる。

受入番号		収蔵番号		分類番号	
—		—		—	
資料名	通常				数量
	他地域				
受入	年月日	年 月 日	方法		
	住所				
		TEL. — —			
氏名					
備考					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					



資料タグに記入している様子

記入にあたっては耐水性や耐光性を考慮し、2Bの鉛筆を用いている。

資料タグ

資料に結び付けるために使用するタグ。
15.0cm × 11.0cm である。
紙製で、記入後にジップ袋に入れて、タコ糸で資料に括りつける。



コンテナ箱

資料を収蔵するための箱。
プラスチック製で、上に積み上げることができる。

コンテナ箱を積み上げた様子

コンテナ箱が積み上げられている。
前述のように民俗資料は形状が様々なため、図左上に映り込んでいるノコギリの柄のようにコンテナ箱に入り切らないものもある。



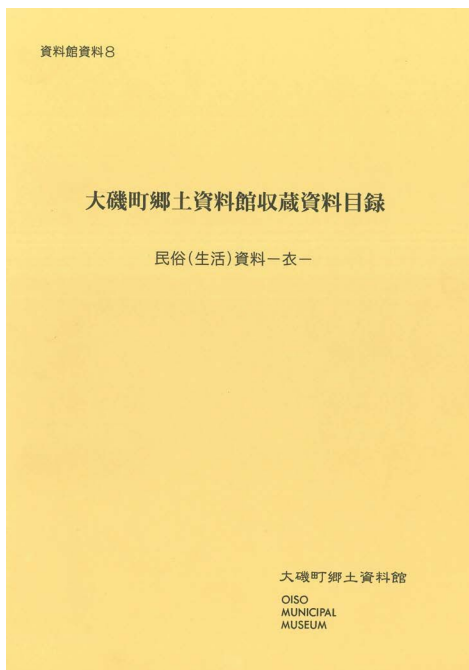
市民と協働での民俗資料の整理

当館の数ある民俗資料のうち、1991年に小田原市^{まえがわ}前川から450点余りの衣類を受入れたことをはじめ、大量の衣類資料のコレクションは充実を見せている。

さて、資料の収集状況自体は充実しているものの、どのように整理をしていくのかは当時の当館で課題となっていた。そこで、市民協働のワークショップとして「民俗に親しむ会」を組織し、衣類資料の整理を1999年より進めることとなった。市民が集い、それぞれの目線で衣類自体がどのように使われていたのかを話し合いながら基本カードに記録していく。月1回ペースで続けられたこの活動は5年間ほど行われた。

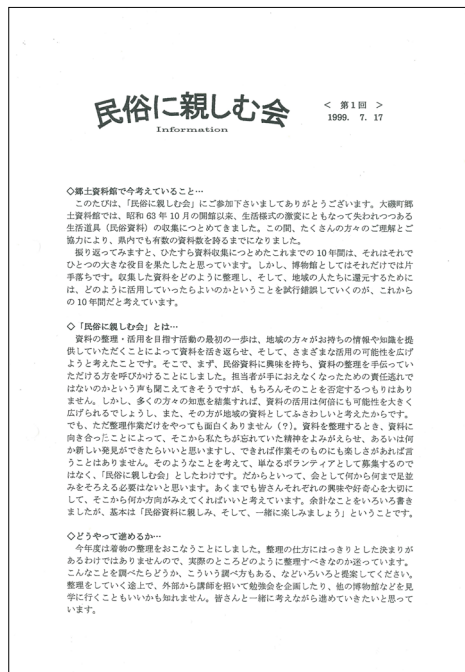
この活動成果は、2004年開催の春季企画展「布と着物 一縫う・着る・装う・繕う・楽しむ」や、2004年刊行の『大磯町郷土資料館収蔵資料目録 民俗（生活）資料—衣—』（資料館資料8）へと結実することとなった。こうした郷土資料館の成果そのものだけでなく、ワークショップに参加した市民それぞれにも、多様な経験をもたらしたことは想像に難くない。

博物館は研究機関としての一面を持っている。民俗分野の場合、民俗資料は多数集めて比較などの調査研究を行ってこそ、真価を発揮する。さらに、民俗資料を含む博物館資料は調査研究に限らず、市民協働などの多様な場にも成り得る。博物館資料は様々な可能性を秘めているといえよう。



『大磯町郷土資料館収蔵資料目録 民俗（生活）資料—衣—』（資料館資料8）

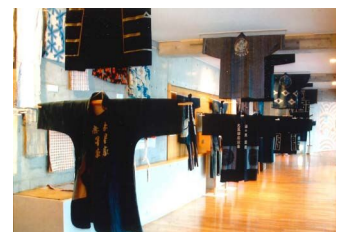
2004年刊行



「民俗に親しむ会」通信 第1回

1999年7月17日刊行。

2004年5月刊行の55号が最終号となった。



春季企画展「布と着物 一縫う・着る・装う・繕う・楽しむ」（左図：企画展示室、中図：エントランス、右図：回廊）

会期：2004年2月24日（火）～4月11日（日）

企画展示室だけでなくエントランスや廻廊など、館内全体に資料を展示する大規模な展示であった。

④ 自然分野

自然史資料の収集・保管

自然分野の資料収集の範囲は広く、動植物や岩石、化石などを収集している。動物、また植物という大きな括りの中でも、動物では、脊椎動物の哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類や無脊椎動物の貝類、昆虫類等があり、植物では、種子植物、シダ植物、コケ植物、藻類、菌類などがある。郷土資料館で受入れたのちの資料の保存方法は、種類によって異なり、乾燥標本や液浸標本といった形で保存している。

ちなみに本展で展示をしている鯨ひげと脊椎骨は、乾燥させた状態で保管しているが、常温で保管するためには特別な保存処理が必要となる。鯨ひげの場合は、①除肉処理、②薬品（ホルマリン）浸け、③固定・乾燥、④仕上げの工程を行い、脊椎骨の場合は、①除肉処理、②脱脂作業、③漂白・乾燥、④部分補修・仕上げの工程を通して、展示資料として活用できるようになる。

自然史資料の収集は主として、取得した生物がその日、その場所に存在したという証として記録することを目的としており、資料の受入れにおいて、取得した日にちや場所、採集者（もしくは拾得者）等を正確に記録することが大切である。現在、未整理の資料を含め約 12,000 点の資料を収蔵しているが、この中には、大磯町編『大磯町史 9－別編 自然－』や神奈川県植物誌調査会編『神奈川県植物誌調査会 2018』に掲載されている大磯町内採集の標本が含まれている。また、当館は地球規模生物多様性情報機構（GBIF）が運営する GBIF データポータルや国立科学博物館が運営する S-NET（サイエンスミュージアムネット）に生物資料データを提供しており、現在、鳥類 120 件、哺乳類 20 件、昆虫類 1,500 件、貝類 6,000 件、植物 500 件の合計 8,140 件が公開されている。

ミンククジラの鯨ひげ受入れ

年 月 日	内 容
2016 年 3 月 30 日	大磯町国府本郷の葛川河口付近に漂着する。 国立科学博物館と神奈川県立生命の星・地球博物館、新江ノ島水族館、大磯町郷土資料館で調査を行う。
2016 年 3 月 31 日	鯨ひげ及び筋肉を採取する。 ミンククジラを埋却する。
2016 年 4 月 6 日	農林水産省に「混獲又は座礁等した鯨類の学術目的所持の届出書」を提出する。 郷土資料館のフリーザー内で冷凍保存をする。
2023 年 4 月 14 日 ～年 6 月 21 日	鯨ひげ保存処理委託を実施する。

<参考> ミンククジラ骨格等の受入れから展示までの経過

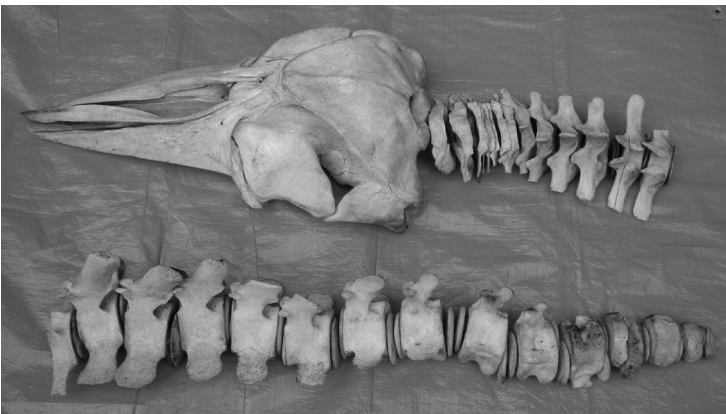
年 月 日	内 容
2006 年 2 月 25 日	郷土資料館で頭骨、胸椎、脊椎骨、肩甲骨、鯨ひげを受入れる。
2006 年 2 月 26 日	頭骨、胸椎、脊椎骨、肩甲骨を郷土資料館敷地内に埋蔵し、除肉を行う。
2006 年 9 月 29 日	埋蔵した部位を掘り起こす。
2006 年 9 月 30 日	掘り起こした部位の水洗いを行い、乾燥させる。
2007 年 9 月 6 日	ミンククジラ骨格等クリーニング委託を発注する。
2007 年 9 月 13 日 ～2008 年 1 月 25 日	ミンククジラ骨格等クリーニング委託を実施する。
2008 年 4 月 27 日 ～6 月 15 日	学習参考資料展「動物の分類～脊椎動物と無脊椎動物」で展示する。



①受入れたミンククジラの頭骨と脊椎骨等
(2006年2月25日撮影)



②除肉した骨格の掘り起こし
(2006年9月29日撮影)



③水洗い乾燥後の頭骨と脊椎骨
(2006年11月6日撮影)



④学習参考資料展の展示風景
(2008年4月29日撮影)

※クリーニング前の写真は、モノクロ加工を施した。

参考文献

- 青木雄司 1996「ホ乳類」大磯町編『大磯町史9 別編 自然』大磯町
- 井田敦彦 2014「勲章・褒章制度」国立国会図書館編『調査と情報—ISSUE BRIEF—』829
- 大磯町編 2004『大磯町史6 通史編 古代・中世・近世』大磯町
- 大磯町編 2008『大磯町史7 通史編 近現代』大磯町
- 大磯町編 2007『大磯町史10 別編 考古』大磯町
- 大磯町郷土資料館編 2004『大磯町郷土資料館収蔵目録資料 民俗（生活）資料—衣—』（資料館資料8）大磯町郷土資料館
- 大磯町郷土資料館編 2025『くらしとムシー生活・信仰・文化財—』大磯町郷土資料館
- 小川直之 1989「贈答の容器」『民具マンスリー』22（6）
- 長田平 2007「大漁の証 万祝」神奈川県立歴史博物館編『特別展 大漁の証 万祝（まいわい）』神奈川県立歴史博物館
- 神奈川県立歴史博物館編 2007『特別展 大漁の証 万祝（まいわい）』神奈川県立歴史博物館
- 神谷敏郎 1984「オオギハクジラとカワイルカ」『鯨研通信』356
- 北水慶一 2024「《新収蔵資料》鯨ひげ」『Report—大磯町郷土資料館だより—』44
- 佐川和裕 1998「一軒に残された布」国立歴史民俗博物館編『布のちから・布のわざ』国立歴史民俗博物館
- 佐川和裕 2005「衣類整理と「布と着物」展—ワークショップ参加者との協働作業を通して—」『民具マンスリー』37（12）
- 佐藤正紀 2014『新版 勲章と褒章』全国官報販売協同組合
- 高橋典子 2003「漁撈」大磯町編『大磯町史8 別編 民俗』大磯町
- 千葉県立中央博物館編『万祝博覧会—海をまとう—』（令和6年度特別展）千葉県立中央博物館
- 畑聰一郎 1999「稻荷講」福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館
- 8人の学芸員 2007『博物館の仕事』岩田書院
- 花上諒大・崎山直夫・加登岡大希・鈴木聡・石川創・山田格・田島木綿子・樽創 2021「相模湾・東京湾沿岸で記録されたハクジラ亜目マイルカ科について」『神奈川自然誌資料』42
- 平塚市博物館編 2026『ひらばく 50年 市民と歩む地域博物館』平塚市博物館
- 水沼淑子 2024『近代日本の別荘建築—湘南大磯の邸園文化』創元社
- 宮戸理恵・後藤ひろ子 1997「近世高麗寺村の村役人」『大磯町史研究』5
- 鷺見みゆき・花上諒大・崎山直夫・鈴木聡・石川創・山田格・田島木綿子・樽創 2022「相模湾・東京湾沿岸で記録されたハクジラ亜目（マッコウクジラ科 Physeteridae, コマッコウ科 Kogiidae, アカボウクジラ科 Ziphiidae, ネズミイルカ科 Phocoenidae）について」『神奈川自然誌資料』43

参考 Web サイト

くじらタウン

<https://www.kujira-town.jp/>（2026年4月7日最終確認）

鯨ポータルサイト

<http://www.e-kujira.or.jp/gahou/minke2.html>（2008年4月4日最終確認）

資料保存器材 HP

<https://www.hozon.co.jp/>（2026年4月23日最終確認）

タウンニュースホームページ「大磯町 防災服 40年ぶり刷新 総合防災訓練で初着用」

<https://www.townnews.co.jp/0606/2023/09/29/699367.html>（2026年4月15日最終確認）

特種東海製紙株式会社ホームページ

<https://hogos.tt-paper.co.jp/>（2026年4月23日最終確認）

協力者・協力機関（敬称略、五十音順）

飯島友
石井三郎
石井雅之
加藤さおり
亀倉弘美
川原隆
木村純子
島崎一文
杉山久雄
鈴木聡
高橋正巳
田尾誠敏
西村双葉
二宮敏明
服部恵子
藤原英理子
柳田博司
吉田暁子
渡邊航也
渡邊正

大磯港恒丸
神奈川県立生命の星・地球博物館
国府新宿原町稻荷講
国立科学博物館
国立国会図書館
湘南定置
新江ノ島水族館
西小磯町内会
歩射保存会
虫窪向窪稻荷講

大磯万博 2026 大磯町郷土資料館新収蔵資料展

発行日 2026（令和8）年4月25日

発行：大磯町郷土資料館 〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1 TEL 0463-61-4700

執筆：國見 徹 P.6-11,56-57

富田 三紗子 P.12-21

鷹野 真子 P.22-31

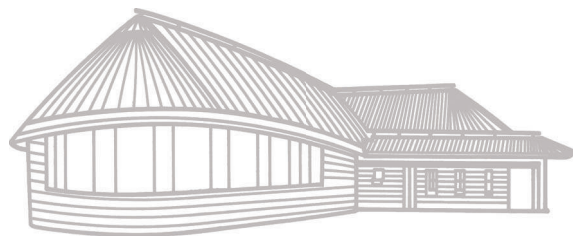
長谷川 明香 P.32-35,58-59

真保 元 P.36-47,54-55,60-63

北水 慶一 P.48-52,64-65

編集：真保 元

表紙：長谷川 明香



大磯町郷土資料館

Oiso Municipal Museum